

孤独な夜のココア



田辺聖子
孤独な夜のココア

新潮社

孤独な夜のココア

定価 750 円



発行 昭和53年10月15日

10 刷 昭和54年 8月20日

著 者 田辺聖子 (たなべせいこ)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71 振替東京4-808

業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411

印刷所 錦明印刷株式会社 製本所 大口製本

© Seiko Tanabe, 1978 Printed in Japan

乱丁、落丁本は御面倒ですが小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取替え
いたします。

孤独な夜のココア*目次

春つげ鳥 7

りちぎな恋人 25

雨の降つてた残業の夜 43

エープリルフル 61

春と男のチョッキ 81

おそすぎますか？ 99

ひなげしの家 119

愛の罐詰 137

ちさという女 155

石のアイツ 173

怒りんぼ 191

中京区・押小路上ル

装
幀
本^{もと}
く
に
子

孤独な夜のココア

春
つ
げ
鳥

わたしを驚かせてやろうというつもりでか、笹原サンはその家のことを、あらかじめひとことも口にしなかった。

おどろかすつもりもあつたかもしれないが、きつと、わたしの氣に入る、という自信もあつたのかもしれない。

その晩、三宮さんのみやのバーでいつものように落ちあうと——ここで会つて、いつもは食事して、そうして、たいてい坂の上のてっぺんにある、天道虫てんどうむしのように小っちゃな、綺麗きれいなホテルへいく。わたしは、そこを「天道虫ホテル」と名付けていた。(わたしは何にでも、わたしなりの名前をつける。わたし自身はそう呼びならわしてるもんだから、ついその名でよぶと、人にはわからないことがある)

天道虫ホテルでは泊るときもあるし、帰るときもあつた。おもに、笹原サンの仕事の都合によつた。わたしのほうに障害はなかった。一緒に住んでいる姉たちも、笹原サンをよく知っているので、もう、なんにもいわなくなっている。

たぶん、笹原サンと結婚するだろうということがわかつてるので。

それに、笹原サンは、姉や姉の夫よりずっとトシがいつてオトナなので、いまさら、ゴチャ意見するのもこっちの方が気はずかしい、と姉たちは思わしめた。笹原サンは、二十二のわたしより、ちょうど倍、年上だった。

何にでも、わたし流の呼び方をする癖があるわたしだが、笹原サンだけはほかに呼びようがない。

笹原サンは笹原サンだ。

わたしと同じぐらいの気持ちの若々しさにも思え、また、とてもオトナっぽくみえるときがある。
(オトナだから当然だ)

笹原サンは死んだ父の仕事関係の知人だった。父とは年齢がはなれていたけど、わりに仲よかったみたい。私は、短大のときの保証人になってもらったり、した。

笹原サンは、まあ親切な人だった。父を亡くしたわたしたちに、いろんな面倒をみてくれた。母は父よりはやく亡くなっていたので、わたしは、一人ぼっちになったわけである。

(姉がいるけどもう結婚していた。だからわたしの感覚でいえば、ひとりぼっちなのである。たとえ両親のいないみなしごの少年でも、おばあさんかおじいちゃんが健在で、その子かわいがって育てている場合、わたしの言語感覚では孤児とはいえない)

わたしは、かわいがってくれる人がもういなくなったのだから、みなしごだった。

たぶん、みなしごでなくなりたい、というわたしの願望が、笹原サンとわたしを近づけたのかもしれなかった。

笹原サンは、むろん、おくさんも子供もいた。神戸の貿易会社の社長なので、従業員もいた。

おくさんを、わたしは見たことがない。名前が「登利子」だというのが、わたしは、

「バードさん」

とよんでいた。そうしてそれは、いつのまにか、わたしと笹原サンのあいだの共通語になった。バードさんは、たいそう熱心な教育ママだそうで、一年のうち半分は、家にいないそうである。東京と九州にいる息子たちの寮や下宿を見廻っているそうであった。

「高校からもう、遠い学校へ入れて下宿させよんねんからなあ。健康管理だけは、親御さんときどき来て、氣をつけてください、なんて学校がいうから、よけいハッスルして、いきよんねん。すべて本末転倒ですよ。そんな遠い学校へやるより、親の手元から近くの地元校へ通わせた方がええのに」

と、笹原サンはいつていた。

笹原サンは、

「本末転倒」

ということがきらいなんだって。

物事の本质をみぬく、そしてそこだけをじーっとみつめて、あとのことは抛つたらかしに
しとけがいい。

だのに、世の人は大かた、物ごとの本質より、そこから派生した瑣末な、小さなことにこだわ
り、しまいにそれに捉われすぎて、本来の大事なことがみえなくなってしまう、それは、おろか
しいことだ、と笹原サンはいう。

だから、バードさんが子供の教育問題に関心があるあまり、

「子供をつくった大元おもとの、僕のことを忘れてしまうのは、本末転倒や」

と笹原サンはいうのだった。それから、本末転倒の例として、こんなことも話してくれた。

新聞の家庭欄に、女のひとばかり投書する欄がある。何気なくみてたら、病臥びようが中の妻が、やさしく看護してくれる夫と子供に、心から感謝するという文章である。妻の病気は、過労である。五人の子供たちが、小さいながらに母を心配して、これからはお母ちゃんが退院したらみんなでもっと手助けしよう、といい合い、妻を泣かせたという文面であるらしかった。

「これも本末転倒やわな」

と、笹原サンはふしぎそうに、

「大体、五人も子供つくるから、過労になるねん。そんなことしてあとでうれし泣きするより、子供つくらんといたらよろしいでしょう」

「アハハハ」

とわたしは笑ってしまふ。笹原サンのいうことはどことなくおかしい。無邪気で、まじめにいつているのであるが、わたしには、おかしかった。

オトナの男の人、という気がせず、同年輩の若い人とあそんでいるようだった。でもやはり、青年たちとはすこし、ちがってた。

それは笹原サンが、無邪気でとても人がよかったからである。無邪気で人がよい、ということ、自分に自信のある人でないと、それをさらけ出せないわけである。自分に自信があるのは、長く人生を戦って、しかも戦いに全勝してここまでできたからかもしれない。

でも笹原サンには、勝った人の傲おごりはない。きつと負けかたも、無邪気だったのだろう。

わたしは、

「笹原サン好きよ」

といったら、笹原サンは、

「うれしいねえ、ほんとかねえ」

とぱつと顔を輝やかせていった。

「本末転倒したらいけない、というたやないの」

とわたしはいった。そしたら、笹原サンにひきよせられた。

笹原サンには、オトナの男の人のへんな臭い（煙草たばこのにおいとか、何かをたべたにおいとか、髯ひげ剃りローションのにおい、金庫のにおい、事務機のひきだしのおい）なんかちつともなかった。それから、ひきよせるときの力に、エゴイスティックなものがなくて、

（もし、よかつたら、こっちへきませんか）

というような腕ののびしかただった。「こっち」というのは、笹原サンの胸板である。とても大きくて頑丈そうなので、ほそいわたしなんかは、

「スポッ」

とうまくはいりこみそうな、居心地よさそうな感じである。笹原サンは、背はふつうぐらいだけれど、とてもがつしりした体つきなので、見た眼は、たいへん大男にみえる。

午後にあうと、いつも、もう髯ひげが濃くなりはじめている。それはまるで、何かのとり返しつかぬ悔恨に似ている。父も、姉の夫も、髯ひげが濃くないので、笹原サンの頬ほや下顎したあごの濃い影は、わたしには珍らしかった。髯ひげは濃いのに、笹原サンは額はも、あたまのてっぺんも禿はげている。でも、

それもわたしには無邪気にみえる。そうして、髯はざらざらして、痛いのに、彼の唇はやわらかいのだった。

それは山のてっぺんの公園だった。町へ下りて、わたしがとつっきのお店のショーウィンドーに横目をつかったら、笹原サンは、

「何か、買うたげる」

といった。わたしは、ねだることが彼を喜ばせそうな感じがして、練り物の大きな珠をつらねたネックレスを指した。それは不透明な灰青色で、馬の眼ほどもある大きな珠だった。

「そんな大きなものをかけるの。重たすぎて、碧の細っこい首が折れるよ」

と笹原サンはいったが、買ってくれた。わたしは焦茶のセーターを着ていたので、包んでもらわずにさっそく首にかけた。思ったほど重くなく、それに、珠のひんやりした冷たさが快よかった。一粒ずつ、唇にそっと触れながら歩いていたので、（坊さんの数珠みたくに長い）笹原サンにおくれた。駐車で笹原サンはもう車に乗ってまっていた。

「フーラフーラ、歩きながら、一粒ずつ、齧ってるようにみえた」

と笹原サンがいうので、わたしは笑わずにいられたかった。

会社でとてもいそがしい日があった。わたしは夢中で仕事をしていたため、笹原サンがいるのに気付かなかった。笹原サンは用事で来たがついでにわたしの仕事ぶりを見にいったということだ。

「真剣な顔をして働いとった。よう働く若者というのは、僕は好きやねえ」

わたしはたまたま、あの日、忙がしい日でよかったと内心、よろこんだ。笹原サンにほめられ

たり、気に入られたり、したかったので、どんな卑怯な手段でも、いい点を加えられていくのはうれしかった。

バードさんが、東京に、子供たちの勉強のためのマンションを買ってから、笹原サンはほとんど一人きりらしいので、毎日のように会えた。笹原サンは、バードさんが、笹原サンの一ばん可愛がつている娘サンまで東京へつれていき、名門の私立女子学園へ入れようとするので、バードさんに腹をたてていた。

「こまったオバサンや」

と笹原サンはいった。わたしは、そうですね、ともいえずに、ただ黙ってたけど、バードさんに悪い点が増えられていくことに、意地わるいひそかな喜びを持たずにはいらなかった。そうして「オバサン」というコトバにあてはめる字としては、わたしはなんとなく、「ヨバサン」とあてはめていた。見馴れた字の「オ」とちがつてなにか馴染みのない、よそよそしい「ヨバサン」の方が、バードさんにびったりするようだった。

それより、笹原サンが、かわいがつてる娘サンに対して、わたしはヤキモチをやいていた。そうしてまた意地わるくひそかに、（はやく東京へいってしまえ——）と思っていたが、それは、楽しみにしているお嬢さんの顔が見られなくなると、笹原サンを苦しめることになるので、ちょうど、半々の気分だった。

でもそんなことを考えるようになったのは、バードさんのヨバサンや、笹原サンの娘サンのことばかり意識し出したからである。

天道虫ホテルへいく前から、笹原サンは、バードさんと離婚する、といっていた。バードさん